伝統の変質

別府史談会　会長　後藤重巳

二十四節気の「雨水」も過ぎ、農村の各地で農作物の植え付けが始まった。古く農家の主人には「土作り」・「作物育成」の二大労務に加えて「作物の種づくり」の大役があった。秋の収穫時、生育の良好な「種実」を精選し、よく乾燥させブリキ缶などに保管し、翌春に蒔くのである。いわゆる「伝統野菜」である。そのような「種」を守る篤農家も次第に少なくなり、昨今は種苗店の店頭には、原産地チリ・ブラジル・フランス・オランダ・・・などの種物が、にぎにぎしく多種・大量に出回るようになった。辺地に残る「伝統野菜」造りの話題が、時折、テレビの特集番組などに登場する所以である。

伝統的芸能も急速に変化している。社会の高齢化と人口減によって、地域の伝統芸能を受け継ぐ階層が急速に減少し、若年者を動員した「保存会」が各地に盛況している。もともと村々の「祭り」に参加するには、厳しい制約があった。

家では、当主と嫡子、あるいは村方では氏神様の氏子にかぎるなどの規制であった。

今、家や氏子の減少によって、「神輿」を担ぐ者が無くなり、地域に住む大学生をアルバイトで雇う例など恒例になった。その場合、日本人学生は「きついからいやだ」と多くの場合、断るという。

祭りそのものにも大きな変化が起こっている。半世紀もまえ、私ども若いころは、十一月の「霜月祭り」には、近隣村の祭り場に出向き、「神楽」や「獅子舞」を見学したものである。一番の好番組「八岐の大蛇」の大蛇には、昨今のごとき竹ヒゴ造りの張子大蛇はなく、俵の上に弓状にそらした「しめ縄」が張られ、スサノオのみことがそれを切るのであった。

最近、大分で出会った「八岐大蛇」は二頭頭の見事な張子大蛇であった。

私の記憶の限り、粗末ながらも「張子大蛇」の初見は、昭和二十五・六年ころ、緒方町の「千石祭り出会い神楽」で、ある一座でこれを拝観した記憶がある。

「伝統」は頑なに守るべきものでもない。時にしたがって変質してもおかしいものではない。

『別府史談』の会歴も、四半世紀を迎えた。会員で皆して、別府史談の伝統づくりに励みたいものである。

平成二十五年三月